

群生を荷負してこれを重担とす
設我得仏 国有地獄餓鬼畜生者、不取正覚

(『無量寿経上巻』 聖典六頁)
(同 十五頁)

娑婆を生きる力

第2組 正受寺住職

海老原 博

text by Hiroshi Ebihara

お寺をお預かりすることはつくづく尊いことだと実感する。

5年ほど前、中陰のお参りにて二十代後半の男性から質問を受けた。「お寺さん、『大応具』って何さ？」と。勤行本を見ながら一緒にお勤めをしてくれたので、きっと同朋奉讃のご和讃の最後の文言に気を留めてくれたのだろう。とても嬉しく、若い人の瑞々しい感性に感動した。「供養を受けるのに相応しい人、仏さまのことだよ」と嬉々として答えたが、さほど興味はなさそうな様子だった。しかし、「如来おわします」という証のように思い、どんな方でも求めていることを確信した尊い御縁だった。

畠山明光先生の金言に「仏法は独りでに広まる力を持つ。その邪魔だけはしないでくれ」と。自らの在り方が常に問われる。

以前、拝聴した乙部町P連研修会の講演にて紹介されていたエピソード。講師は函館の婦人科開業医、小葉松洋子氏で「性教育について」。函館の養護学校での講演の後、高等部の教諭からの質問だったそうだ。受け持ちの高2の男子生徒、生来の脳性マヒを抱え母親と二人暮らしの中、修学旅行にて生まれて初めて母親から離れて過ごすことになった。そこで先生に相談。「旅行の時にアダルトビデオを観たい」と。悩みぬいた末に結果観せなかったそうだが、生徒の肩を抱いて謝りながら共に涙したという。学校に戻ってからもそれが正しかったかどうかをずっと悩み続けている。「私は間違っていないですか？」と。教え子の生い立ちまで鑑みて悩み共に涙する姿に如来の「荷負」を見る思いがする。

娑婆を生きる力は「人間回復」。差別と支配に満ちた、同族相食む苦界こそが仏縁に満ちた世界。しかし、「生死出ずべき道」を求めなければ「回復」すべき人間を取り戻すことも覚束ないだろう。釈尊は「出世間」(出家)を勧める。取りも直さず「カースト」という世間からの脱出だ。

20年ほど前、インド旅行をした。憧れのブッダガヤを参拝した際、立派な塔と金色に輝く仏像より驚いたのが、たくさんの物乞いの人。皆、足が不自由で這って迫ってくる。何等かの理由で障害を得た人が集まってくるのかと思いきや、通訳の方の説明によると、カーストに従ってそうなった

という。足は、親から切られるらしく「その方が哀れみを乞い実入りがいい」からだそうだ。愕然とする現実に言葉を失う。まさに人間喪失、娑婆そのものの姿に「無三悪趣の願」が第一願に座ることが腑に落ちる。

親鸞聖人の御生涯に思いをはせるとともに、「唯可信斯高僧説」と歩むべき道を示し「地獄一定」という力に満ちた言葉に思いを新たにするのが私の寺院での活動の勇気となっている。